

《現地報告》

千葉県三芳村、樋口さんの米づくり

須藤 護*

1.はじめに 平成6年2月に、千葉県安房郡三芳村において稲作の作業行程を記録し、ビデオ教材を制作する計画を立てた。三芳村山名地区で農業を続けている樋口守さん（大正10年生れ）との幸運な出会いがあったからである。ここで改めていうまでもなく、今日の稲作は各行程において機械化がすすみ、化学肥料や農薬の使用もすすんでいる。多大な労力をかけ、腰を鋭角に曲げておこなうつらい作業を軽減して、収穫をあげる工夫がなされてきた。国をあげての事業であったといっている。その結果、ここ30年ほどの間に、日本の稲作は大きく様変わりした。

ところが樋口さんは、伝統的な作業行程のなかで、いいものは極力残し、要所所に機械を用いて労力を軽減する方法で稲作をおこなっている。土づくりに力をいれ、化学肥料や農薬を使わない農業の試みである。この樋口さん一家がおこなう作業の一つ一つを追っていくことで、すでに消えてしまったと見られている日本の伝統的な稲作の方法や考え方を探ることができると思われた。

樋口さんとの出会いが幸運であったことは、この試みにたいして快く協力してくれたばかりでなく、その一つ一つの作業を実際におこなう機会を与えてくれたことである。きちんと農業をおこなってきた人は、素人が手をだすことをあまり好まないと思う。作業を手伝うというより、邪魔していることのほうが多いからであり、今振り返ってみると、やり直さなければならなかった作業も多かったのではないかと思う。しかしながら、実際に水田のなかに入り、その作業を体感することで得られるものはこのほか大きい。また、作業中にかわされる何気ない会話のなかに、ヒントになる話が少なくない。そのようななかから各所に残っている民俗的な要素を見だし、日本人の稲作にたいする考え方を学ぶことが、この教材制作の大きな目的であった。

*すどう まもる、放送教育開発センター

稲作にたいして、長い間蓄積されてきた知恵と工夫は、農業にたずさわってきた人々のみならず、日本人全体の大きな財産でもある。いいものは継承していくことが望ましいのであるが、その一方では、多大な労力と工夫を要求される。したがって、いかにその労力を軽減しつつ、いいものを残していくかという試みは重要であり、試行錯誤を要するむずかしい問題であろう。この報告がそのための手がかりになれば幸いである。今回は一連の稲作作業のうち、6月初旬におこなった田の草とりまでの行程を中心に述べてみたい。

2. 田植えまで 樋口さんが経営している農地面積は水田が4反歩、畑が7反歩弱である。減反政策がはじまる前（昭和45年以前）は、水田は7反7畝歩を耕作していたが、このうち2反5畝歩は畑に転作し、1反2畝歩は現在他の人に貸している。また、畑の7反歩のうち約3反歩は、昭和30年代に山を開墾したミカン畑、2反5畝は前述の水田からの転作分、そのほかに8畝歩ほどの屋敷畑と若干の畑がある。

屋敷の背後に1町歩弱の山を背負っており、ここには一部杉の植林がなされ、雑木と竹林が広がっている。春になるとこの竹林からは3種類のタケノコを取穫し、出荷する。この山には大量の落ち葉が蓄積するため、良質な堆肥の原料を提供している。このほか、養鶏（現在は成鶏100羽、雛200羽）を含めたものが、樋口さんの農業経営の全体像である。今回は4反歩の水田が中心になる。

樋口さんの稲作は、まず田植えの時期を決めて、それを基準にして苗代づくり、種まき、本田の準備などの仕事の日程と段取りを決めていく。近年田植えの時期は早くなっており、多くの兼業農家では5月初旬の大型連休を利用しておこなっている。しかし樋口さん宅では、今年（平成6年度）は苗とりを5月21日（土）、田植えを5月22日（日）におこなうことを決めた。

田植えの時期を5月下旬に設定したのは、いくつかの理由があった。その一つは水温が上がるのを待って田植えをすることで、イネミズゾウムシの被害を防ぐことであった。水温が充分上昇していない5月上旬に田植えをすると、イネミズゾウムシに犯されやすい。この害虫は稲の根を食ってしまうので、その後の苗の成長に大きな支障をきたす。そのために一般の農家は田植え前に一度本田に殺虫剤をまかなければならないのであるが、それでもこの年被害にあった苗が何カ所かで見られた。5月下旬になって水温が上がってくると、この被害は少なくなるという。

つぎに、その後の発生が予想されるウンカ、カメムシ、イモチ病などの病害

虫に負けないほどの丈夫な苗をつくる必要があった。そのために、自分で種籾を選定し、苗代をつくり、手植えの田植えを予定していた。種籾の選定をして芽出しをするのに2週間ほどかける。また天候が順調であれば、苗に種まきをしてから35日から37日くらいになると、苗が20センチあまりに成長し田植えをすることができる。したがって、5月下旬に田植えをおこなうためには、遅くとも4月上旬に種籾の選定をおこない、4月中旬に苗代の種まきをおこなう必要がある。その間に苗代の床づくり、本田の田おこし、水止め等の作業を進めていく、という計画であった。

この計画では3月末から4月上旬にかけて、稲作のための農作業がはじまることになるが、この時期は稲作の機械化、とくに田植え機用の苗の栽培がおこなわれる以前の作業日程に近づけている。三芳村では3月のお彼岸前後に、各地区の人々が集まっておこなうヒワリ（氷祭）という祭があった。この祭が終わると春の農作業をいっせいはじめるという習慣があった。このように、かつておこなっていたように、稲作行程を自然のサイクルに極力あわせることで、薬を使わずに病害虫の被害をくい止め、丈夫な稲を育てることが樋口さんの試みであった。

また、田植えの日を土曜日と日曜日にしたのは、今日的な農村の事情があった。樋口さん夫妻は専業で農業に従事しているが、同居している子息やそのお嫁さんは勤めをもち、孫たちは学校に通っている。普段は農作業にかかわることが少ない家人に、何らかのかたちで田植えに参加できるようにしたいと考えていたからである。田植えには数人の手伝いを頼むので、お昼ご飯やお茶を出さなければならない。このようなときに炊事やご馳走の運搬など、若い者の手伝いが必要になり、間接的であるが家族全員参加の田植えにすることができる。

- 1) 種籾の採取と保存 種籾用の籾は前年の秋、稲刈りをする前に水田をまわって、種籾としてよさそうな稲を見定めておく。その基準はとくに決まっていないようであるが、一つの見方として、ほかの稲よりも比較的背丈が低く、黄金色にみのった稲を選ぶという。たとえばコシヒカリであれば普通1メートル20センチほどの背丈が伸びるが、同じ水田内であっても土壌、もしくは肥料の関係で、数センチほど背丈の低い稲ができる場所があり、このような稲を種籾の対象にする。背丈の低い稲は実の数は少ないけれども、しっかりと実が入って重みがある。

種籾用の稲は、稲刈り後5日から1週間ほどナラシにかけて天日乾燥させ、脱穀をする。ナラシはハザ、もしくはハデのことで、この作業をホダカケとも

よんでいる。種粃の脱穀をするときは脱穀機の回転を遅くして、粃がむけてしまわないように配慮する。粃がむけてしまうと発芽率が悪くなるからである。脱穀してから1日ほど乾燥させ、水分を15%ほどに保ちつつ、ネズミに食べられないように土蔵のなかにつくられた穀入れに保管し、または納屋の梁などに下げておく。水分の量は現在は計測用機械で計るが、昔は検査員が自分の歯で粃を噛み砕いて、経験的に計測したものであったという。

2) 種粃の選別と量

農家にとって種粃は、苗の生育と米の収穫量にかかわる最も重要なものであり、そのため入念な選別をおこなう。この作業をいい加減にすませると、秋になって思わぬ不作に見舞われることになる。種粃を選別する主な目的は健康な種の選別とバカイネの予防である。バカイネは夏までは普通のイネのように順調に成長していくが、出穂する時期になっても穂を出さず、せつかく世話をしても結局稔らないイネをいう。バカイネが発生すると収穫量が激減する。このような事故を未然に防ぐためにおこなうのが種粃の選別作業である。

第一回目の選別は、秋に脱穀して乾燥し、保存しておいた種粃をトウミにかけて、比重の重い種粃と軽い種粃を選別し、軽い種粃を取り除く。トウミによる風選でいい種粃として残った粃をさらに塩水選にかける。塩水選は桶の中に水をためて、塩を加え、塩水の浮力を利用して、種粃を選別する作業である。塩水の濃度は、桶のなかに生卵を入れて卵が水中で浮くくらいの濃度が適当であるという。今回樋口さん宅でおこなった水と塩の割合は水1斗2升到たいして塩が3キログラムであった。

この塩水の中にトウミで選別した種粃をいれ、浮いたものを取り除いて、桶の底に沈んだ実の充実しているものだけを取りだし、これを真水で洗ってカマス詰めにする。先にうるち米の選別をおこなって、これを何度も繰り返していくと、選定された種粃を洗っていた真水が、少しずつ薄い塩水に変わっていく。もち米の塩水選は、この薄い塩水を使って一番最後におこなう。もち米はうるち米にくらべると比重が軽いので、うるち米用の濃度の塩水を使うと、みんな浮いてしまうからである。なお、塩水選に使った塩水は、多少薄めて鶏の餌にまぜて与える。鶏にも多少の塩分を与える必要があるからである。

選別が終わり袋に詰めた種粃は、一晩ぬるま湯につける。種粃の殺菌と発芽の準備をさせるためである。わざわざぬるま湯を用意するのではなく、塩水選をおこなった日は風呂を沸かし、家族がみんな入ったあとの風呂の中に浸しておく。手を入れてみてぬる目のお湯であれば、種粃を浸すと温度がさらに下が

るので特別な温度調節はしない。ただし、薪で風呂を炊いていた時代は、おきが残っていて温度が下がらずに、種粃が煮えてしまったという失敗もあったという。

一晚風呂に入れた種粃は翌日取り出して、きれいな小川の縁に1週間ほど沈めておく。以前は手足を洗ったり、道具を洗ったりした清らかな小川が流れていて、そこにもっていけば水を替える必要はなかったが、現在は桶の中に水をためてその中に浸しておく。桶の水が汚れ臭いがでてくるので、何度か水を取り替える。このようにして1週間がすぎると、1ミリ近く伸びた白い芽を出しており、種粃の準備が整ったことになる。

なお、この地方では、平床苗代で苗をつくっていた昭和20年代までは、塩水選をおこなったのち、芽だしも殺菌もせずすぐに種まきをしたという。種まきの時期が現在より1カ月ほど遅かったので、水田の水温が上がっており、芽だしをする必要がなかったからである。

種まき用に用いる種粃の量は一定の基準があった。大体の目安として、本田1反歩(10アール)あたりの苗を植えるのに、4キログラム程度(2升5合～3升)を準備すればいいという。この基準は、うるち米ももち米も大体同じである。この目安より多くまくと苗が細くなってしまい、少なければ種まきのあとに鳥などに食べられてしまったときに、苗の不足をきたすことがある。また天候の不順、肥料や水の調節の失敗などにより、苗が充分育たないことがあった。実際は4キログラムよりも少なくてもたりのるのであるが、種粃は多少あまるように準備したほうが安心であった。

樋口さんはじめ用心深い農家では、1反歩あたり2倍にあたる8キロほどの種粃を用意していたという。あまった種粃は焼き米にして儀礼や食用に用いた。また何らかの手違いがあって、種粃が不足してしまった農家に分けてあげたりした。このように種粃をあまらせる計算をすることによって、不測の事態に備え、またとなり近所、村落共同体の中での人間関係を維持していたのである。このほか不合格品の屑米は、食糧として貴重なものであったが、今日では自給用のコメは十分に確保されているから、鶏を飼っている農家では、いずれも鶏の餌にすることが多い。配合飼料を購入するよりも、自分の家で生産されるものを使った方が、採算性があがるからである。

3) 苗代の床づくり 苗代田の耕作や苗代の床づくりもこの時期におこなう作業である。今回おこなった苗代づくりは、上げ床苗代(保温折衷苗代)とよばれているもので、こ

の苗代は大量の水を必要とするので、水利の便のいいところ、また地味がよく肥えている水田を選んで使用する。つまり、各農家で最も条件のいい水田を苗代田として使用することになる。このような水田はさほど多くないから、毎年同じ田を使うことが多い。苗代田として使用した水田は、苗をとり終えた後に本田として使用する。この年の苗代の床づくりは4月10日（日）におこなった。

苗代田は床をつくるためのスペースを囲むようにして、鍵型にテビをつくり、1枚の水田を2つに分ける。テビは水田のクロ（畦）と同じ要領で泥を盛り上げたもので、3回ほどクロヌリ（水止め）をして水がもれないようにする。クロヌリ（水止め）については後述する。テビを境にして2枚に分けられた水田は、苗代用の床をつくる部分をテビウチ、その外側をテビソトとよんでいる。テビウチの面積は約2畝、テビソトのそれは約4畝の広さであった。テビソトには溝々と水をたたえておき、苗代への水の供給、調節をおこなう。また常にテビソトに水をたたえておけば、水温が上昇しており、苗代に水を補給する必要が生じたときに、冷たい水がはいるのを防ぐことができる。いわばテビソトは、苗代に保温された必要充分な水を供給するダムのような役割をはたすことになる。

テビウチは苗代用の床をつくるためのスペースであるが、テビウチの周囲と、床と床の間の泥をクワですくい上げて、幅1尺ほどの溝をつくる。この溝は水が通う水路になり、絶えず水が侵入しているので、床に水分を供給する役目をはたすことになる。一方、床に肥料を入れたり、種まきや苗とりをおこなうための作業用通路にもなる。すくい上げた泥は水路の両わきに盛り上げて、苗代の床をつくるために使う。

苗代の床は幅4尺6寸、長さ3丈6尺（約12メートル）ほどで、床の面積は4坪ほどのものである。幅4尺6寸のうち種をまく幅は約4尺で、その両端に3寸ずつの延びをつけておく。種をまいたあとに温床紙をかけて、風で温床紙が吹き飛ばされないように縄で固定するのであるが、そのためのスペースを3寸ずつ両端にとっておくわけである。また、床の中央を多少高めに泥をもって、なだらかに両端を低くしておく。これは雨が降ったときに、雨水が床の両端につけた通路（水路）に流れ出るように配慮したものである。温床紙の上に雨水がたまると床に凹凸ができ、その部分だけ苗の成長が悪くなるからである。4坪の苗代から、約5畝ほどの広さの水田に植える苗をとることができる。先に述べたように、この年樋口さんは4反の稲作をおこなうから、このような床を8本準備した。

苗代用の床ができあがり水が供給されると、床の部分に肥料を入れる。床は少々堅めの泥が盛り上がった感じで、指を差し込むと簡単に穴があく程度の堅さである。ここで使う肥料は、樋口さんの場合は鶏糞をよく腐らせたものを使用している。手にとってみても鶏糞の影もかたちもなく、すでに土になっているような肥料である。一本の床に必要な肥料の量は、4斗俵入りの袋を1袋半というから6斗ほどになる。これを床の泥が全く見えなくなるくらい散布して、床に馴染ませるように、両手を泥の中に押し込んでよく混ぜていく。馬や牛を飼っていた時代（昭和30年代まで）は、厩肥を使っていた。

次いで幅10センチあまり、長さ70センチほどの薄い板を、何度も何度も床の中に差し込むようにして、さらに肥料が床に馴染むように、また下に沈んでいくようにしていく。肥料と泥とが適度に混じりあっていないと、発芽率が悪くなるからである。そして通路の水を床にかけながら、同じ板で床の上面をきれいにし、約1ヒロ（両手を広げたくらいの幅）をやり終えると次へと進む。

このとき床の中央部を多少高くしておくことは先に述べた。また床の幅は4尺もあるので、反対側までは手が届かない。床の手前半分だけ進めていくか、もしくは慣れた人であれば後ろをふりむいて、通路（水路）をはさんだとなりの半分をやりながら、前に進んでいくと作業の能率はアップする。

4)種まき

苗代の床づくりが終わって2、3日後に種まきにこぎつけることができる。肥料を入れた床が安定し、多少乾燥して堅めになり、種がまきやすくなるからである。農作業をするときは天気の良い日が好ましいが、とくに種まきはおだやかな風のない日でないと都合が悪い。雨が降るとせっかくきれいにならした床に小さな穴があいて、均等に種がまけないからであり、風の強い日は温床紙があおられてきれいにはることができないからである。だから種まきを予定していた日に雨が降り、また風の強い日であれば、日を改めなければならない。あまり種まきの日にちが延びてしまうと、種籾の芽が伸びすぎて芽を痛めてしまうことがあり、芽がからまって種蒔きに余分な時間を要する。このようなときは温度調節をして、芽が伸びすぎないように配慮しなければならない。

この年は4月13日（水）に種まきをおこなったが、前日の天気はたいへん荒れ模様であった。三芳村に通うようになって以来、毎日の天気が気になるようになっており、この日も何度か電話をして樋口さんに様子を伺った。多分明日は天気が回復するであろうとのことであったが、念のためにテビントに貯えていた水を苗代田に入れ、床を水で覆っているという。4月13日は快晴ではな

かったが、雨はやんで風もさほど強い日ではなかった。そしてこの日の朝から予定どおり種まきはじまった。

種まきは、種をまく幅をきちんと決めてからはじまる。床の長手側の両端に、幅4尺を基準にして2本の竹をさして縄を結びつけ、ちょうどレールを敷くように床の端から端まで2本の縄をはる。中央の4尺分が種をまく幅で、縄の両端には3寸ずつ延びがでているが、そこに肥料や種がはみ出さないようにするためである。この床に肥料をまいたときも同様にして縄をはり、無駄がでないように配慮していた。樋口さんの使っている肥料は堆肥、もしくは鶏糞を長い間寝かしておいたもので、種籾と同様貴重なものだからである。

1枚の床に2本の縄をはり終わると、縄の内側に種をまいていく。カマスから直径、深さも50センチほどの大きさのザルに、少しだけ芽を出した種籾をうつし、ひとつかみ握っては床の上にはばらまいていく。まずは床の境界になっている縄の内側にそって種を落としていく。種と種が重ならないように、そして種と種の間があきすぎないように気を使う。次いで種を手先に放り出すようにして、床の上に均等に落ちるようにばらまいていく。種が重なってしまったところは適度に離してやり、あきすぎたところには補充する。だいたい床にまんべんなくまいて1升5合ほどの種籾の量になる。

そして施肥をしたときと同じように、1人分の作業範囲である1ヒロほどの範囲をやり終えると、先に進んでいく。種と種の間を極力均等にしていくのは、同じような脊丈と太きの稲が育つようにするためで、種が混んでいるところは成長が遅く、逆にあいているところは大きな稲に育つ。他の作業と同様、たいへん手間がかかり、根気のいる作業であり、腰を鋭角に曲げておこなうきつい作業である。種をまいた後からローラーでかるく押しつけて、種を半分ほど床の中に沈めていく。半分ほど土に埋めることで、順調な発芽を促すのである。次いでその種が全部隠れてしまうほどの厚さに、クンタンを上からかけていく。クンタンは、秋に脱穀が終わったあとにでた籾殻を蒸し焼き状にしたもので、種籾を保護し、保温する役目をする。このとき使用したクンタンは、肥料の量とほぼおなじ量であったので、4斗俵入りの袋を1袋半（6斗）ほどであった。

クンタンをかけたその上に温床紙をかけ、苗床の長手の方向の両端に縄をはって、風で飛ばされないようにする。さらに、この方法で苗代づくりをした家は樋口さんをはじめ数件であったので、鳥に種をつつかれないように、苗代のまわりに防鳥用の網をはりめぐらせた。これで種まきの作業は終了するが、約32坪の苗代の種まきにかかった手間は約4人日であった。種まきが終わって

2週間ほどたつと、苗が4～5センチほどの高さに成長し、温床紙を持ち上げるほどの背丈になるので、温床紙を取り去る。しかし苗はしっかり育っているので、以後苗とりや田植えの時期まで水の調節をするだけで、苗の保護をすることはない。

この時期（4月）は天候がかわりやすい時期なので、水の調節と苗の成長具合をみるために、毎日田まわりをする。たとえば、苗床が強い雨に叩かれると凹凸ができてしまい、窪んだところの苗は成長が遅くなる。それを避けるために、デビソトに貯めておいた水を苗床がかぶるほどの高さにはっておく。この状態にしておくと、かなり強い雨や雹が降っても苗床は守られるという。そして天候が回復したときに水を引き、平常の状態に戻しておく。また、苗代田の水が不足すると床が固くしまっていくので、苗とりの時に苗がとりにくくなる。このように水の調節を失敗すると、その後の作業に大きな影響を与えるので、毎日田の見回りをおこなうのであった。貯水池であるデビソトの役割が、有効に発揮される時期でもある。

5) 本田の荒おこし 話は前後するが、本田の準備は前年の冬からはじめる。稲刈りが終わったあとの乾燥した水田に肥料をまき、荒おこしをしておくことが、この地方では一般におこなわれていた。冬の間に田おこしをしておくこと、土壌のなかにふくまれている水分が凍結と氷解を繰り返して、細かく砕けていくからである。しかしながら、昭和30年代にミカンを導入してからは、この作業をする農家は少なくなった。

近年は耕耘機、もしくはトラクターが普及しているので、人力で田おこしをすることはなくなったが、かつては万能クワでひとクワひとクワ耕していったものであった。一人前の男で1日耕して約3畝の田おこしをしたといわれている。樋口さんの場合は、今年は4反歩の水田にイネをつくるから、クワでおこしていくと、田おこしに2週間ほどを要することになる。またこの地方では、昭和20年代までは牛による犁耕がおこなわれていた。犁耕の場合は牛の仕込方によって異なるが、慣れている牛であれば人力の5倍ほどの能率が上がったという。ただし、一般には、犁を操る人のほかに、牛の前につけて牛を誘導するハナドリとよばれる人がもう1人必要になる。

この年樋口さんは、水田の荒おこしをミカンの収穫が一段落ついた2月上旬におこなった。小型の耕耘機を使って、2人日役で終えた。

6) クロヌリ 種籾の選別、発芽作業と並行して、本田の作業が続く。本田には4月に入るとすぐに水を入れる。水を入れる理由は、土をやわらかくしてクレ返しの作業を楽にすることと、雑草の発生を防ぐことであった。この水がもれないように水田の中の泥を田のクロの側面に塗り付けて水止めをする。三芳村山名の水田の多くは緩やかな棚田が多い。棚田の上手のクロ（畦）をマネ、下手のクロをクロバタという。マネの上手には1段高い水田がある。その水田を支えるために頑丈なクロがつくられている。ここから水がもれることはないから、下手のクロバタの部分だけに水止めをすればいい。

マネのクロヌリをしないもう一つの理由は、下手の水田の所有者は上手のクロ（畦）であるマネの所有権がないからである。つまり、棚田の所有権はマネの下の水田のきわからクロバタとその下手のマネまでであった。したがって、上手のマネには手がつけられないのであるが、雑草が繁茂すると稲の生育に影響するので、土手の部分の草は、下手の水田の所有者が刈ることができた。山の裾に面している水田も同じことで、山の所有者が他人であっても、稲の生育に支障をきたすようであれば、裾野の草は刈り取ることができた。

水止めはまず、クロを切ることから始める。前年にクロヌリをした部分の土をきれいに切りとって、新たにクロヌリする部分を露出させ、水が漏れている部分を確認する。このとき、まるで糸をはったように、まっすぐにクロキリをしなければ気がすまない人もあったというが、日本の農民の多くが、このような感覚をもっていたように思う。クロキリのつぎにクロコジをおこなう。クロコジはクロヌリがしやすいように、クロのまわりを水にひたし、泥を細かくしていく作業である。ちょうど左官屋さんが壁土を塗りやすいように、水を加えて土をこねる作業にしている。

水止めは万能クワでクロの側面に泥を寄せては盛り上げ、ヒラグワの腹の部分でこすりつけて目つぶしをして、サワガニやモグラ、ネズミなどがクロにあけた穴の目止めをしていくという、力の入る作業である。

クロヌリは通常シタグロとウワグロの2回おこなう。シタグロは1回目のクロヌリで、水田に水を入れたばかりの4月はじめにおこなう。シタグロはクロの側面を中心に田の中の泥で補強する作業であるが、2回目におこなうウワグロは、田植えをする1週間ほど前に、クロの側面をさらに補強するとともに、クロの上面も塗り上げていく。クロの上面はきれいに平らにならして、ここに味噌、醤油、豆腐などの原料になるダイズを植える。この地方のものは、とくにおいしい豆なので、煮豆にして食べることが多かったようである。水田の泥

を塗ったものであるから肥料がきいており、いいサイズがとれた。田のクロの縁にダイズを植える風景は、水田の基盤整備と稲作の機械化が進む昭和30年代までは日本各地にみられたものであった。

稲作を順調に進めていくには4月はじめに水田に水を入れ、以後稲の生育に応じて水の調節をしつつ、稲刈りの前まで水を貯められる状態にしておく。これに耐えられるように頑丈なクロをつくっておかなければならないので、ここでいい加減な仕事をすると田植えをすぎたころになると水がなくなってしまうことが多い。入梅をすぎたころになると雨が少なくなるからである。このような貴重な水を極力外に逃がさないためにも手をぬくことはできなかった。と同時に、まっすぐに筋が通り、整ったクロをつくることに、気を使う人も少なくなかったようである。

7) 水田を水 　　クロヌリ（水止め）が終わった段階で水田のなかに水が入り、つぎの作業としてクレ返し、そして田植えの1週間前のころになると、シロカキをして本田の準備をすすめていく。クレ返しは荒おこし後のクレをさらに細かくたく作業であり、シロカキは水田のなかに高低差ができないよう、平らにならしていく作業である。1週間前にシロカキをするのは、田植えまでには水田の水が澄み、苗をまっすぐ植えるために引く線が引きやすく、田植えがしやすいからである。

水田の面を平らに保っておくことは本田の準備作業の基本であり、これを十分に配慮しておかないと水深が一定しないので、さまざまな不都合がおこる。したがって、水田の荒おこしやクレ返し作業の段階から、高いところの土を低いところに移すなど、時間をかけてこまめな配慮をおこなう必要があった。シロカキはその最終段階の作業である。水深が一定しないことによっておこる不都合の一つは、苗の成長がまちまちになることである。水の深いところは分けつが遅れ、成長も遅れる。水の浅いところでは水温が上がりやすいので、その逆の現象が起こる。

田の草の処理も大きな影響がでる。本田のシロカキをしたあとに水を少し多めに入れておけば、田の草が生えにくいので、田植え後の田の草の作業が楽になり、また省略ができる。しかしながら、水深が一定していないと、深いところでは草がでにくいのが、浅いところは相応の草が発生し、水深を深くした意味がなくなってしまう。また、ザリガニがたくさん発生したときは、苗を痛めてしまうことになるので、水深を浅めに調節する。水深を浅くするとザリ

ガニの行動半径がせまくなり，被害も少なくなる。

なお水の調節については，別の機会にまとめてみたいと思っているが，稲の成長と田の草，水中の生物，その他の作業とのバランスの問題であり，その時期の水田の状況をみながら，経験的な判断によっておこなってきた。したがって，農家によって水に対する考え方が少しずつ異なっていたようである。たとえば樋口さんの場合は，とりわけ田の草にたいして気をつかっており，シロカキが終わるとすぐに深水をはっておくという。そして，田植えの直前に水田がヒタヒタ（水深1～2センチほど）になるまで水を落とす。水を落とすのは線引きや田植えがしやすいようにするためであるが，田植え直前まで水を貯めておいて草の発生を防ごうとしているのである。

3. 田植え 1) 苗とり

4月13日に苗代の種まきをしてから，38日目の5月21日（土）に苗とりが始まった。苗は20センチあまりにのびていた。この日苗とりにかかわった人は樋口夫妻のほかに，近所から手伝いのおばさんが3人，そして樋口家では家族総出でご馳走やおやつづくりにあたった。このほかに私たち（作業の記録とあまり役にたたないお手伝い要員）が3人加わった。樋口さんはこの要員で，約3反4畝歩の苗とりと田植えを，2日間で終える見積もりを立てていた。結論を先にいってしまえば，この見積もりはほとんど狂っていないかった。

苗とりは両手でおこなう。苗床にむかって深く腰をまげ，両手，とくに親指を器用に交互に動かしながら2，3本ずつ苗を引き抜いていく。それぞれの手で軽くつかめる程度の苗を取り終わると，水路（通路）にたまっている水で根についている泥を洗い落とす。そして根と根の部分を軽く突き合わせて，根の凹凸を揃え，両手の苗を一つに合わせてワラで軽くしばる。苗のしばり方はごく簡単であるが，根の方が広がって葉の方がすばまるように，苗の上の方を結束する。少々の移動ではほどけにくく，また田植えの際にはすぐ苗が取れるようなしばり方である。

苗の取り方，水洗，結束は，すべて田植えを迅速におこなうための工夫である。両手で2，3本ずつ苗を取るのには，苗を植えるときに一度に3，4本程度まとめて植えるので，苗を分けるときに根と根がからみ合わないようするためであり，根を洗うのはできるだけ苗を軽くして，運搬のための労力を軽減し，田植えの速度をあげるためである。泥のついた苗は重し，田植えのスピードが上がらない。また，田植えの前には，あらかじめ苗の束を水田のなかに適当な間隔をおいて放り投げていくが，このとき根の方が広がっていると，水田の

なかでしっかりと立ち、泥が葉につくことが少ない。泥がつき、水に濡れた苗もなかなか植えにくいものである。

苗代田のあちこちに散らばっている苗の束を集め、本田へ運んで苗取りは終わるが、この日、田植えのベテラン4人（樋口さんの奥さんと手伝いの3人のおばさん）と、あまり役に立たない3人の手伝い要員で、約32坪の苗を午後2時すぎころまでに取り終わった。

2) 田植え

女たちが苗取りをしている間に、樋口さんは本田の筋ひきをはじめた。1週間前にシロカキが終わっているので、水田の水は澄んでいる。また筋ひきをすする前に水田の水を水深2センチほどに落としているので、筋が写りやすく、また引いた筋がよくみえる。筋を引く道具をスジヒキといい、長さ3メートル50センチ、幅30センチほどの長方形の板に、約30センチ間隔に竹の棧を打ちつけたもので、長い柄がついている。棧と棧の間隔は苗と苗の間隔を決める基準になり、水田の条件によって多少異なっている。山手の水田の場合は9寸5分（約30センチ）であるが、平地の日当たりのいい水田の場合は1尺1寸から2寸にひろげている。日照時間が少ない水田は苗と苗の間隔を狭く、逆に多い水田はひろくとしているのは、田植え後の苗の分けつ数が異なるからである。

このほかに水田のなかに縄をはって、その縄に沿って植えていく方法があった。スジヒキを使う場合は、植えながら前に進んでいくので足跡は邪魔にならないが、縄の場合は後ろへさがりながら植えていく。そのため足跡に植えた稲は浮いてしまう恐れがあるので、現在ではおこなわれていない。

また苗の分配も、あらかじめ水田のなかに適当な間隔をおいて苗の束を放りなげ、それを拾いながら植えていく方法と、腰に籠を下げてそのなかに苗をいれ、植えていく方法とがあった。前者は身軽な状態で田植えができる。一方、腰籠を使うと苗を持ち歩くことになるので少々重くなる。しかし苗がぬれることがないので根がからむことが少なく、苗を分けやすいので田植えの速度も早く進むという。樋口さん宅の田植えは両方の方法がとられていた。

スジヒキ、苗の分配など、田植えの準備が整うと、女たちが水田のなかに入り田植えが始まる。1人が5サオ（5筋）を受け持つのが標準で、身支度を整えた数人の早乙女が、いっせいにならんで苗を植える姿は実に見事である。左手に適当な量の苗をもち、その手の平のなかで3、4本ほどの苗を分けて、準備しておく。そして右手で苗の束をとり、あらかじめ引かれてある筋に沿って植えていく。植え終わったときにはすでに、左手には次に植えるべき3、4本

の苗が準備されている。そのくりかえしであるが、植える速さは見事なもので、約1分間に40から50株の苗が植わっていく計算であった。田植えの速度は、左手もっている苗のかたまりのなかから、3、4本の苗をいかにすばやく揃えるかが勝負であり、それが植え手の力量を決することになる。したがって、苗とりの段階から植えるときのことを考えて、苗をひきぬく本数も、その後の処理も、理由があつてのことであつた。

そのほか、田植えのコツはいくつかあつた。素人考えでは、植えた苗が倒れるといけないので、つつい深めに植えてしまうのであるが、分けつを促進するためには倒れない程度に浅植えをしていくのがコツであるという。太陽にあたる部分をできるだけ広くとるといふ理由であると思われる。そのかわり、1週間ほどたたないと根が十分に活着しないので、少々深水にして苗の倒伏を防ぎ、同時に田の草の発生もおさえていく。また、水が充分にかかかっておらず、泥が表面にでていっている部分に苗を植えると手のあとが穴があいたように残るので、かるく埋めていく。水をかぶっている水田は自然に穴はふさがっていくが、泥がでていると穴はそのまま残り、苗が倒伏することがあるからである。また、苗とりのときに苗をしばったワラは泥のなかに埋めておく。やがて腐って肥料のたしになった。

田植えの仕事量は、苗とりは別にして、一人前の人で1日5畝が標準であるといわれている。樋口さん宅の苗とりと田植えの労働量を概算してみると、苗とりに半日あまりかかり、残りの1日半で約3反4畝ほどの田植えが終わった（この年、田植えを予定していた水田は4反歩であつたが、そのうち6畝ほどはもち米を植える予定をたてていた。しかし、もち米の苗の成長が早かつたので、樋口夫妻が六畝分の苗とりと田植えを前日にすましていた）。作業の段取りは樋口さんがすすめ、ベテランの植え手が4人で、約3反歩の田植えを1日半でやり終え、残りの手伝い要員3人が1日半で約4畝歩を植えた計算になる。

3) 田の草と水生生物 水田の耕作から田植えまで、そしてその後の田の草取りまでの作業行程を追っていくなかで、水田や用水路に棲息する生物の存在が、大きな意味をもっていることがわかってきた。当然のことではあるが、水稻栽培には相当量の水が必要であり、沢水に頼っている小さな山田から、大規模な貯水池から計画的に水をひきいれた大きな水田まで、水とは切り離せない関係をもっている。この水のなかにさまざまな生物が棲息し、これらが農作業と大きくかかわってきたばかりでなく、人々の生活、とりわけ食生活と大きくかかわってきたことを

つよく感ずる。これらの生物たちの存在は、稲作と農耕儀礼、農耕用具、農耕技術などとともに、稲作がもたらした複合文化の一つとして興味深い問題を提示してくれている。

水田のなかにはドジョウ、タニシ、ザリガニ、サワガニ、カエル、オタマジャクシ、アメンボウなど、様々な生物が生活している。このなかにはサワガニのように沢からのこのこ上がってきて、畦に穴をあけて、貴重な水を流してしまうものもある。また土中にいるミミズや昆虫をとるために、モグラが畦に穴をあけることがよくある。クロヌリ（水止め）の作業はこの穴をふさぎ、水のもれない丈夫な畦をつくるためにおこなうことはすでに述べた。

このように、農作業の邪魔をする生物がいる一方で、有益な生物もまた多い。樋口さんの水田は山手にあるものと、比較的平地にあるものと2カ所に分かれている。平地の水田はすでに基盤整備が終わっているために、長方形のすっきりした形をしており、農業用機械も使いやすい。周囲の水田は皆機械を使って作業をする人が多く、農薬も使っているという。そのためか、平地の水田には水田のなかに棲息する生物がほとんど見られない。

しかも、農薬を使わない樋口さんの水田には、水中の生物が見あたらないかわりに、びっしりと田の草が生えていたのである。田植えから約2週間後のことであった。田の草をおさえるために、水田の水を比較的深くしておくという。大まかには、田植えが終わったあとは稲の背丈の半分くらいは水を貯めておく。そうすると田の草は生えにくいというのであるが、それでも近くによってみると相当数の田の草が確認でき、この草を除くための労力は2人～3人で、丸1日を要する仕事量であった。水田の面積は約7畝5歩ほどである。

これにたいして、山の手にある水田は基盤整備をおこなっていないために、不定形な形をしている。相対的に1枚あたりの水田の面積がせまく、機械が入りにくいこともあって、この地域一帯の水田はまったくの有機農法で稲を栽培している農家が多い。そのため、水中の生物が水田のなかを自由に泳ぎまわっている。とくに水の取り入れ口の近くに多くの生物がかたまっている。水田のなかでザリガニ、ドジョウなどが泳ぎまわることで、生えはじめた田の草が駆除されていくのだという。田の草の一番草は苗の根のまわりをかきまわしていくことで、草の根を水中に浮かせ、大きく成長することを防ぐのであるが、水中の生物がこの役割をしてくれているのである。ザリガニは田の草だけでなく稲までも挟みとってしまうことがあるが、収穫にはさほど影響ないことが多いという。またドジョウは田の草を食べているようである。

このようにして、平地の水田と山の手の水田を比較してみると、草の量が驚くほど異なるのである。したがって、草とりの労力も平地の水田の半分、もしくはそれ以下ですみ、なかにはまったく草とりをしなくてもいいほどきれいな水田もある。暑い盛りの草とりがつらい仕事であるだけに、ザリガニやドジョウの役割がことのほか大きいことを感ずる。

「樋口さんの米づくり」は、6月末に2番草とりが終わった段階である。これから夏に向かっての稲の管理、そして秋には稲刈り、乾燥、脱穀、調整の作業が進められていく。今後もこの作業を追いかけながら、稲作が持ち伝えてきた技術、及び文化的要素を含めて、幅広く探っていく予定である。また、今回はビデオによる記録のほかに、文章と写真による記録を続けており、それぞれのメディアの特徴を生かした教材制作の方法について、一つの方向性を出していきたいと考えている。